

期末レポートについて (ver. 2)

桂田 祐史

2026 年 7 月 10 日, 2026 年 7 月 17 日

ゼミで発表したことを“原則として全て”レポートにまとめて書く。短いまとめではない(発表を聞いていない、初めて読む人が参考書なしで分かるように書く)。発表時に分からなかったが後から分かった、ということも書いて良い — もしあれば。

- 2 回の発表で全然違うことを話した場合は、どちらか一方だけでよい。
- 提出とフィードバックは Oh-o! Meiji のレポート・システムを使う。
- 1 次提出〆切: 7 月 21 日 (火曜) (注: 定期試験は 7/23 から). この日までに提出されたものは、7/25 (土曜) までにコメントをフィードバックします。
- 最終提出〆切: 8 月 2 日 (日曜) 23:00. フィードバックコメントに可能な限り対応すること。

注意事項

- 一番大事なことは想定する読者。このゼミのレポートでは、“自分達”と同程度の知識・学力のある人、今回発表したことを知らなかった頃の自分を想定して下さい。
- 常識でない言葉や知識は、必ずレポート中で説明する。数学用語ならば定義を書くこと。
- 何か主張する場合は、その根拠を述べる。数学的事実ならば証明を書くか、証明がどこに書かれているか。“事実”については、データとか観察記録とか、何かの文献書とか。
- 実験などは追試が出来るような情報をつける。数値実験などはプログラムの添付などを検討する。

- 形式について
 - フォーマット A4サイズの PDF にする。
 - ページ数 自由 (何ページ以上とも、何ページ以下とも言わない。)
 - 表紙 「総合数理ゼミナール レポート」以外に内容を表すタイトル
学年・組・番号・氏名, 提出日付 (西暦)
 - 目次 各 section の見出しと開始ページ (ページ番号をつける)。自動化お勧め。
 - イントロ 何がテーマかを書く。なぜそれを選んだかも書くことを勧める。
何が分かったかを (本論前に書けるならば) イントロに書いても良い。
(論文では、先行研究をここで説明して、自分の研究の位置づけをする。)
 - 本論 ここが一番長い。複数の section に分けることになるのが普通。
 - 結び 何が分かったか (できたか) を書く。やり残した課題を書くこともある。
 - 付録 細かいことは、結びの後に、付録として収録する。
プログラム等もなるべく載せて下さい (計算チェック可能なように)。
 - 参考文献表 書籍ならば著者名・タイトル・出版社・発行年、
論文の場合は著者名・タイトル・論文誌名・巻号・発行年・ページ、
読みたいと思った人がスムーズに見つけられるようにする。ネット資料
もそれに準じる (著者名 (分かる範囲)・タイトル・URL と閲覧日 (出版
社・発行年の代わり)。)

注意しても、なかなか出来ない人が多い。先輩のお手本として、岡本 [1] をあげておく。

- 参考文献表は、参考にしたものは載せる (本文中で何を参考にしたか言及する)、参考にしなかったものは載せない。
- 表現については、今の段階であまり神経質になる必要はないが… (以下、よくする注意)
 - － レポートは原則として文章にする (スライドとは違う)。
 - － その一方で、箇条書き、表、グラフは有効に用いる。
 - － 主語・目的語は省略しないことを勧める。暗黙の主語が文の途中で変わったりしないようにする。
 - － 内容を考えて適切に分ける (節、小節 (項)、パラグラフなど)。
 - － 節などは番号をつけ、必要ならば階層化することを勧める。
 - － パラグラフ (段落) の先頭の文は字下げする。
 - － 口語は使わない。
 - － である調, ですます調を混ぜない (どちらか一つで統一する)。

勘違いしている人がいたけれど、大抵のアプリケーションは、PDF で出力できる。Word ならば、[ファイル][名前をつけて保存][ファイル形式]で[エクスポート形式] PDF を選択する。

参考文献への言及の例をかねて もう忙しくて時間的な余裕がないかもしれないが、配ってある石黒 [2] を一読することを勧める。これは今回だけでなく、今後の授業のレポート、卒業研究レポート、修士論文、…この後もずっと参考になる

参考文献

[1] 岡本錬:「渋滞学」について, 2018 年度総合数理ゼミナールレポート, <https://m-katsurada.sakura.ne.jp/labo/library/zemi2018-report/2018-okamoto.pdf> (2018/8/1).

[2] 石黒圭:【新版】論文・レポートの基本, 日本実業出版社 (2012/3/1, 第2版 2024/2/20).